『東京大学言語学論集』34 (2013.9) 97-109

トカラ語 B«*Udānālaṅkāra*»に於ける *Avadāna* 利用について (2)

荻原　裕敏

キーワード：トカラ語 B　«*Udānālaṅkāra*»　«*Udānavarga*»　説一切有部

要旨

西域北道一帯で流布した説一切有部の文献である«*Udānavarga*»に対する注釈として、トカラ語 B 仏典には«*Udānālaṅkāra*»と呼ばれる文献が存在している。この注釈の作者は *Dharmasoma* であるという事がトカラ語本文中に記されているが、現在まで梵文学中にこの人物及びこの人物に帰せられる他の作品は知られていない。本稿ではこのトカラ語 B による注釈の第十章第二韻文に対する因縁譚として、梵文«*Kalpanāmaṇḍitikā*»第四十八章に相当する物語の引用が見られるだけでなく、尚且つこの物語が同じく«*Udānavarga*»に対する漢訳の注釈である『出曜經』では第十章第八韻文の因縁譚として利用されている点を指摘するとともに、これらの事実は、トカラ仏教において«*Udānālaṅkāra*»が編纂される過程で、本来特定の韻文と結びつけられていた因縁譚が別の物語に置き換えられた可能性を示し、トカラ語«*Udānālaṅkāra*»の全体に対応する梵文の原典は存在しなかったとする筆者の説を支持する傍証となる事を論じる。

1．導入

梵文仏典«*Udānavarga*»(以下 Udv.とする)が西域北道一帯に流布していた事実は、この地域から多くの断片が発見されている事から広く学界に知られている。そして、この梵文仏典に対して、トカラ語 AB には«*Udānālaṅkāra*»(以下 UA とする)という題名の注釈書が存在している事も、既に指摘されているところである。この UA はトカラ語 B 仏典中、単一の作品に属するものとしては最も断片の数が多い写本群の一つであるだけでなく、残存状況が比較的良好な断片も見られる事から、トカラ仏教及びトカラ語の言語学的研究に際して重要な地位を占めるべきものである。

トカラ語 B の UA の研究は Sieg and Siegling (1949) が転写とドイツ語訳を提出した事で開始された。同書には他言語による仏典にパラレルが見られるものは指摘しており、当時としては水準の高い研究と言う事ができる。しかしながら、彼らの研究は部分的に蔵文や漢訳仏典を参照するものの、欧米言語による現代語訳を利用するに過ぎず、大部分はパーリ仏典を参考としたものである。トカラ語仏典研究にパーリ仏典が有益である事は確かであるが、それ以上に現在はトカラ仏教が帰属する説一切有部の文献を参照すべきであるという認識が深まっている。ただ、この部派の梵文仏典は断片が多いため、漢訳及び蔵文訳も

参照しなければならない。この点においてUAは西域北道から発見された梵文断片は言うまでもなく[1]、漢訳及び蔵文仏典とも比較しながら再検討する事が必要となっている[2]。

筆者は現在トカラ語のUAを他言語による仏典との比較を通して再検討する作業を行っている。その成果として、筆者は荻原 (2011a) においてトカラ語BのUAに漢訳『撰集百縁經』及び対応する梵文仏典«*Avadānaśataka*»所収の *Avadāna* が引用されている点を指摘すると同時に、トカラ語のUAの成書過程に関する仮説を提出した。即ち、ある程度特定の物語と結びついた形で伝承されていたUdv.の詩節が、トカラ仏教の側で注釈を作成する際にある詩節はその関係が維持され、ある詩節については別の物語と結びつけられて一書に纏められ、それが現在我々に伝わっているUAとして成立したのではないかと推定するとともに、現在知られているUAの内Udv.の詩節の部分とそれぞれの詩節に付された因縁譚や教理的解釈と言った個別の部分についてはインド語原典を想定する事が可能であっても、この文献全体に対応するインド語原典は存在していなかったと考えるべきである点を指摘した。本稿はトカラ語BのUA写本B23b3-7に別の *Avadāna* が引用されていると見られる点を指摘し、前掲拙稿での筆者の議論を補強する事を目的としている。

2. トカラ語Bテクストと和訳

本節ではトカラ語BのUA中のUdv. X 2に対する因縁譚として与えられている物語のトカラ語Bテクストと和訳を提示する。この部分はトカラ語写本B23b3-7に対応する箇所であり、当該部分のローマ字転写及びドイツ語訳は *TochSprR(B)*I: 39 [German translation], 40-41 [transliteration] で出版されている[3]。ただ、この部分に対応する断片は現在失われており、原文書を調査した上でのローマ字転写を提出する事はできない。そのため、本稿で挙げるテクストは *TochSprR(B)*I 及び Thomas (1983) を参考にしたものである。なお、以下に挙げるトカラ語Bテクストはtranscriptionの形で提示されている。

[トカラ語Bテクスト][4]

B23

b

3 *käṣṣī pudñäkte rājagrine tā$_u$ mäskīträ* ‡ *śaulasw ānande yopsa rīne tā$_u$ pintwāto* ‡ *ājīvikeṃts ceṃts akalṣlyepi masa ostaś* ‡ *weña sw ānandeṃś*

4 *ñi se pilko ste prākr = eṅku* ‡ *mā nesn āyor mā ra telki kartse yāmor yolo yāmor āntpi mā*

---

[1] 西域北道将来梵文断片との比較による成果については荻原 (2011b) を参照。

[2] 断片の転写についてはTamai (2011) が、公開された写真に基づいた新たな転写を公表している。ただし、転写方法は異なっている。

[3] Thomas (1983: 55-56, 183-184) は、このトカラ語B断片の転写とそれに対する注釈を提示しているが、注釈を除いて、基本的には *TochSprR(B)*I のものと同一である。

[4] 本稿で使用する表記法は、基本的に *TochSprR(B)*I で採用されている方法に従った。
[ ]: 不確かな箇所
( ): 校訂者によって推定された箇所
= : sandhi.

nestem 22 *yes no śakkeññi snai keś onolmem tserenträ* ‡ *āyorsa śāte*

5 *yñaktem yśāmna su tänmasträ* ‡ *snai keś aksaścer wnolments āyorntse palauna* ‡ *ñäś mā yesañne wase yokalle rekaunaṣṣe* ‡ *mā tañ kc = āyor aille nesau mā = lyeke-*

6 *pi ten nai pkārsa päst paṣ ñy ostamem* 23 *a(l)l(o)ṅkn = ostwaśco mas = ānande ot pintwāto* ‡ *śeśwer ompostäm masa pudñäktentse tw ākṣa* ‡ *te yäknesa su ājīvikents akalṣälle* ‡ *ñäś weñ = erkatte*

7 *rekaunasa tsoksañ māka* ‡ *[tu] pälkormem pudñäkte ce weña śloko ānandemśco kremnt ārth vyañjantsa* 24 *mā no pakwāri ñäkcye śaiṣṣene yanenta* ‡ *aknātsam no cai mā päll̄ānträ āyor ailñe* ‡ *ta-*

8 *karṣ(k)ñetse no āyor om[p]o(stn ā)[rta]sk[e]mane* ‡ *mäntrāk[k]a no su ms(k)eträ skwassu alyek c(m)elane* ‡ *ce ślok weña ānandemśco yolo pkwalle yolaimmem ṣek mā twe krämpetar* 25

［和訳］

B23b

3 師仏陀はその時 *Rājagṛha* に滞在していました。尊者 *Ānanda* はその都市に布施をするために入りました。彼は外道達の弟子の家に行きました。彼は *Ānanda* に言いました。

4 私はこのような堅固な考えを持っている。布施や捧げ物もする事なく、善行も悪行も両者ともに存在しない。{22} しかし、お前達釈迦の弟子達は数えられない程の人々を欺いている。布施を多く行う者は

5 神にも人にも生まれ変わる、と。お前達は数えられない程の人々に布施に対する賞賛を説いている。私はお前達の言葉の毒を飲むことはないだろう。私はお前にも、また別の者にも布施を与えるつもりはない。

6 この事を理解しなさい。そして、私の家から立ち去りなさい。{23} そこで *Ānanda* は別の家に布施を求めて向かいました。食後彼は立ち去り、仏陀にこの事を伝えました。かの外道達の弟子はこのように私に言いました。そして、不愉快な言葉を私にたくさん浴びせました。

7 それを見て仏陀は *Ānanda* に良い意味と表現を有するこのような詩節を語りました。{24} [A]悪い者達は神の世界には決して赴かない。これらの愚か者達は布施を与える事を賞賛しない。

8 しかし、信仰心を持つ者は布施を喜びながら、このようにして来世において幸福になる。彼は *Ānanda* にこの詩節を語りました。悪は常に悪い事から予期される。あなたは乱されてはならない。{25}

［注釈］

(A): Udv. X 2 (cf. Bernhard 1965: 177) のトカラ語 B 訳に相当する。

na vai kadaryā devalokaṃ vrajanti　bālā hi te na praśaṃsati dānam |
śrāddhas tu dānaṃ hy anumodamāno　'py evaṃ hy asau bhavati sukhī paratra ||

3．パラレルとの比較について

前節で和訳を与えた物語の完全なパラレルは筆者が調査した範囲内では確認されなかったが、以下に挙げる仏典に見られる物語にはトカラ語の因縁譚として利用されている物語と類似している点が認められる。

[漢訳][5]

『出曜經』巻 12　(T.04, no.212, 674a11-675c19)
『大莊嚴論經』第 48 章 (T.04, no.201, 301a11-302a25)[6]
『增壹阿含經』巻 20　(T.02, no.125, 646c29-650a7)

以下には上で挙げた物語の内、トカラ語の UA と同様に梵文 Udv.の注釈書である『出曜經』の物語を引用する。やや長くなるが、後の議論とも関係するためここでは全体を引用したい。なお、トカラ語の物語と関連する部分は下線で示している。

『出曜經』
「信使戒成　　亦壽智慧　　在在能行　　處處見養。
信使戒成者，誰成就信戒。答曰。賢聖人須陀洹、斯陀含。凡夫人者，已成復失。所以然者，皆由貪欲瞋恚愚癡所致，與惡知識從事所致，不與善師從事所致，失時失果失人。須陀洹、斯陀含者，不為此所蹈踐，正使作佛形像來試其人者，作若干變化，心不移易，不為彼屈。昔舍衛城裏有最勝長者，多饒財寶，象馬七珍庫藏充滿。然為人慳貪不肯惠施，其有乞者不聽入内，守瞻門戸牢固門戸，七重皆作重關，石屑塗壁恐鼠穿牆，以鐵籠蓋屋以防飛鳥，家不畜狗恐損米穀。爾時世尊告阿難曰。汝往詣彼降最勝長者。<u>是時，阿難敬奉佛教，即著衣持鉢詣舍衛城到長者家，語長者曰。如來恒説，夫人布施給窮乏者，得五功德。云何為五。一者壽，二者色，三者力，四者樂，五者辯。其有施者獲此五德。長者自惟。吾聞瞿曇沙門高才博學，所演經典八萬四千億象所載不勝，今日多聞弟子來至我家，但説布施，貪著財貨，斯是乞士之法，非是賢智。爾時阿難廣採經義，隨時適彼長者，然其長者心如剛鐵不可移易，語阿難曰。今日欲中有受請處。為欲乞食。阿難報曰。亦無請處，今當乞食。長者尋語阿難。日已欲中宜知是時。阿難即起捨出，更詣餘家乞食。還至世尊所白世尊曰。慳貪長者執意堅固不可降伏。</u>
明日清旦，佛告阿那律曰。汝往詣彼降伏慳貪長者。阿那律受教即往長者家與共相見，漸

[5] その他にも『衆經撰雜譬喩』(T.04, no.208, 533b14-c18) をパラレルとして挙げる事ができるが、内容は『大莊嚴論經』の要約となっており、また以下の議論とは直接関係しないため引用を控える。
[6] この仏典に対応する梵文写本が Lüders (1979 [1926]) によって出版されているが、この物語に対応する部分は失われている。

與長者説微妙法。如來、至真、等正覺恒説此法，夫人布施給窮乏者，獲福無量，現世後身封受自然。長者復念。吾聞阿那律者捨豪族位出家為道，恒受五百鉢食供養，然無厭足，今復來詣吾家勸我布施，復是乞人，非賢士之法。尋語阿那律。日欲逼中，宜知是時。阿那律即起捨出，更適餘家乞食。還至世尊所白世尊曰。慳貪長者執意堅固不可降伏。

佛復告大迦葉。汝往降伏慳貪長者。迦葉受教詣彼長者家與共相見，復與長者説微妙法。如來、至真、等正覺恒所説法，若人布施獲五功德，所生之處人所愛敬。長者自念。斯人昔在家時，九百九十九具梨牛耕田，六十簟金粟一簟三百四十斛，黔毘羅國第一賢女以為妻室，捨彼豪貴今作沙門，何為至他家如乞人，所説歎譽布施，貪著財貨。迦葉無數方便而為説法，意不開解亦不移易，語迦葉曰。今日欲中，有受請處。為欲乞食。迦葉報曰。亦無請處，今當乞食。長者語迦葉。宜知是時。即起捨出更詣餘家，還白世尊。其人熱心意難沮壞。

佛復告目連。汝往詣彼慳貪長者。目連受教即往至彼長者家，與共相見與説布施。如來、至真、等正覺恒説此法，夫人布施給窮乏者，獲福無量，現世後身封受自然。佛告比丘。若有眾生知施果報者，最後鉢中遺餘已不取食，開意惠施，値賢聖良祐福田者，吾證明此其德無量。長者自惟。吾聞此人神足無礙，能移山飛岳翻覆天地，或移他方世界來入此土，眾生之類無覺知者，不能與吾現一神足，方説布施之福，將由慳貪故存於懷，斯是乞人非是賢士。目連復説法，不釋其意，語目連曰。今日欲中，有受請處。為欲乞食。宜知是時。即適餘家。

佛復告舍利弗。汝往詣彼慳貪長者。即復受教詣彼長者，與共相見在一面坐，告長者曰。夫智達之士當分別四法。云何為四智。一者分別布施，二者親近善知識，三者當離慳嫉，四者念修智達。長者自惟。吾聞斯人，年至八歳越眾論上，盡墮諸幢無敢當者，長年十六究盡閻浮利地書籍，無事不開，博古覽今演暢幽奥，天文地理書記圖讖，梵志曆術盡皆通達，瞿曇沙門弟子之中智慧第一，謂為當説智慧微妙之教，今乃復説布施之德，復是乞人非賢士也。語舍利弗。為有請處。為欲乞食。宜知是時。舍利弗即還至世尊所，前白佛言。其人慳貪執心牢固，積薪至天以火焚燒，融消其心意故不革，唯願世尊躬降屈神詣彼長者，示佛威力，除去慳心開發愚惑。

爾時世尊，猶如力士屈申臂頃，至長者家坐於中庭，最勝長者見世尊至，頭面禮足在一面坐。爾時世尊，告長者曰。夫人布施獲五大功德。長者白佛。云何布施得五大功德。佛告長者。第一施者謂不殺生，是謂長者第一施也。若有衆生，持不殺戒，則於一切衆生慈心覆蓋，亦無恐懼，是謂第一施也。長者自念。夫人殺生皆由貧賤，吾今家内饒財多寶所欲自恣，何為當復殺生。此語善矣，當順其教。即白佛言。願身自歸當受佛戒，盡其壽命不敢犯殺。佛復告長者。不犯不與取。若有衆生持不與取戒，則於一切衆生慈心覆蓋，亦無恐懼，是謂第二大施。長者自念。竊盜人物者皆由貧賤，吾今家内，象馬七珍金銀雜寶、車璩馬瑙珊瑚琥珀，充滿庫藏，何為盜竊人物。斯言善矣，當順其教。即白佛言。願身自歸當受佛戒，盡其壽命不犯盜戒。佛復告長者。若有衆生不犯盜者，則於一切衆生慈心覆蓋，亦無恐懼，是謂第二施也。佛復告長者。不得婬姝犯他妻女，若有衆生持不婬戒者，則於一切衆生慈心覆蓋，亦無恐懼，是謂第三大施。長者自念。已無妻者則犯婬姝，吾今家内婇女營從動有萬數，意欲幸納意猶不遍，況當犯他妻女。斯言善矣，當順其教。即白佛言。願身自歸當受佛戒，盡

其壽命不犯婬姝。佛復告長者。若有衆生不犯婬姝，則於一切衆生慈心覆蓋，亦無恐懼，是謂第三大施也。佛復告長者。不得妄語，是謂大施。長者自念。夫人處世所以妄語者，以其貧賤不能自存，是以虛稱詐逸詭調為業故妄語耳。吾今家内積財無數居一億里，豈當妄語耶。斯言善矣，當順其教。即白佛言。願身自歸當受佛戒，盡其壽命不犯妄語。佛告長者。不犯妄語者，則於一切衆生慈心覆蓋，亦無恐懼，是謂第四大施。佛復告長者。不得飲酒，是謂第五大施。長者自念。夫人飲酒三十六失，亡國破家莫不由酒。若我飲酒客來煩鬧，又損我酒加致鬪亂。斯言善矣，當奉佛教。即白佛言。願身自歸當受佛戒，盡其形壽不犯酒失。佛告長者。若有衆生不犯酒者，則於一切衆生慈心覆蓋，亦無恐懼，是謂第五大施。時彼長者内自思惟。如我外道異學内禁所犯，若弟子事師承受教誡，不問多少要當報恩，供養財寶給其所須。躬自入庫選擇白氎，取不妙者欲以獻佛，其所選者捉輒極妙，如是數十反覆不能得弊者，心口共爭，慳貪深固意不開解。正値爾時，阿須倫與忉利天共鬪，或阿須倫得勝諸天不如，或諸天得勝阿須倫不如。爾時世尊以天眼觀清淨無瑕穢，見諸天阿須倫共鬪，復見長者施心慳心共爭，或施心得勝慳心不如，或慳心得勝施心不如。爾時世尊便説斯偈。

施與鬪共集，　此業智不處，　施時非鬪時，　速施何為疑。

最勝長者聞如來説偈，内懷慙愧即出白氎跪受呪願。爾時世尊漸與説微妙之法，講論妙行。所謂論者，施論戒論生天之論，欲不淨想，漏為大患。長者聞已，即於坐上諸塵垢盡得法眼淨，得法獲法，法法成就，分別諸法，於如來法逮無所畏，即從坐起頭面禮足前白佛言。自今已始願為優婆塞，盡形壽不殺。如來默而可之。歸命佛歸命法歸命比丘僧。受三自歸命已，如來即從坐起而去。

佛去不久，弊魔波旬化作佛形像，來至長者家，身有三十二相、八十種好，紫磨金色圓光七尺，長者見已内自念曰。如來向出，還其何速。敬意如見佛而為禮之。不審如來有何教誡。偽佛告曰。吾謂長者高才博智分別機趣，諦念長者愚惑無智，吾向所説四諦者實非真諦，斯是顛倒外道所習。長者尋覺知為詐偽，即報之曰。止止勿語。吾獲慧眼立牢固地，正使汝化億千萬身來至我所，欲使退轉我心者，其事不然。豈當以螢火之光與日競明，田家埠阜欲比須彌，鵄鷲烏鵲金鳥並飛，以汝穢形欺詐偽身，設是幻師不應久停，若是波旬宜速還歸。弊魔波旬聞是語已，慙形愧影即還復身，復道而去。」　(T.04, no.212, 674a11-675c19)

上に引用した『出曜經』の物語は、引用部分冒頭にある Udv. X 8 に相当する詩節に対する因縁譚として利用された部分である。トカラ語 B の UA が対象とする詩節は Udv. X 2 であり、異なってはいるものの同じ章に属する詩節であるだけでなく、下線で示した部分と前節で和訳したトカラ語の因縁譚との間には共通点を指摘する事ができる。即ち、*Ānanda* が布施を求めてある者の家に赴いたところ、それを拒否されて別の家に行き、そこで布施を得てから戻り仏陀に報告するという物語の大枠が一致している。二つの物語に見られる相違は舞台となっている場所を *Rājagṛha* とする UA に対して *Śrāvastī* としている点及び UA では *Ānanda* が赴いた家が外道の弟子の家であり、また彼にひどく罵られた点にある。これらの相違が基づいた伝承に由来するものか、或いは UA 編纂過程において付加されたものな

のか判断する事はできないが、ここでは物語の大枠が一致している点を重視したい。

ここで注意したいのは『出曜經』の因縁譚の後半に波線で示した別の詩節が引用されており、尚且つ先に挙げたパラレルの内、『大莊嚴論經』と『増壹阿含經』にも波線で示した詩節と類似した内容の詩節が見られる点である[7]。ただし、この二つのパラレルは Udv. X 8 に相当する詩節を含んでいない。

『大莊嚴論經』

「復次，得見諦者，不為天魔諸外道等之所欺誑，是故應勤方便必求見諦。

我昔曾聞，首羅居士甚大慳悋，舍利弗等往返其家，而説偈言。

惡道深如海，　亂心如濁水，　為慳流所漂，　言則稱無物。

嫉妬之大河，　邪見魚鼈衆，　充滿如是處，　漂流不止息。

今當拔慳根，　成就施果報，　大悲之世尊，　無畏之釋子，

見諸沒苦厄，　我等應救濟。

爾時尊者摩訶迦葉，早起著衣持鉢向首羅長者家，而讚布施。時彼長者以不喜故如稍刺心，語迦葉言。汝為受請。為欲乞食。迦葉答言。我常乞食。長者語言。汝若乞食宜應及時。迦葉即去。如是舍利弗、目連等諸大弟子次第至家，都不承待。爾時世尊往到其家，語首羅言。汝今應修五大施。首羅聞已心大愁惱，作是思惟。我尚不能修於小施，云何語我作五大施。如來法中豈無餘法。諸弟子等教我布施，世尊今者亦教布施。作是念已，白佛言。世尊。微細小施尚不能作，況當五大施乎。佛告長者。不殺名為大施，不盜、不邪婬、不妄語、不飲酒，如是等名為五大施。聞是語已心大歡喜，作是思惟。如此五事不損毫釐得大施名，何為不作。作是念已，於世尊所深生歡喜信敬之心，而作是言。佛是調御丈夫，此實不虛，自非世尊誰當能解作如是説。誰不敬從無敢違者。即説偈言。

色貌無等倫，　才辯非世有，　世尊知時説，　梵音辭美妙，

所説終不虛，　聞者盡獲果。

説是偈已深於佛所生歡喜心，即入庫藏取二張氎欲用施佛，又自思惟，猶以為多欲與一張。又復更思，嫌其少故還與二張。佛知心念，即説偈言。

「施時鬪諍時，　二俱同等説，　二德都不住，　儜劣丈夫所，

施時鬪諍時，　等同所作緣。」

爾時首羅聞是偈已，如來世尊知我所念，歡喜踊躍破於慳悋捉氎施佛。佛知首羅至心歡喜，如應説法，破首羅二十億我見根，得須陀洹。爾時世尊即從坐起還其所止，首羅歡喜送佛，還于其家，心生欣慶。爾時魔王見首羅歡喜，作是念言。我今當往詣首羅所破其善心。作是念已，化作佛身三十二相、八十種好至首羅家，即説偈言。

身如淨金山，　圓光極熾盛，　自在化變現，　庠步如象王，

---

[7] 『出曜經』の引用中波線で示した詩節は Bernhard (1965) による梵文 Udv.の校訂本には見られないが、この梵文仏典の漢訳とされる『法集要頌經』(T.04, no.213, 782b6-7) には、先の『出曜經』の引用部分が注釈対象とする Udv. X 8 に続いてこの詩節が確認される。ただし、中谷 (1988: 157 及び 183 注 65) が指摘するように、この部分は本来の Udv.の詩節ではなく『出曜經』の引写しである。

來入首羅門，　如日入白雲，　覩者無厭足，　明如百千日。
爾時光照首羅家，首羅驚疑為是何人。即説偈言。
如融真金聚，　充滿我家中，　猶日從地出，　其光倍常明。
説是偈已極生歡喜，如彼甘露灑于其身而作是言。我有大福，如來今者再入我家，雖復再來不為希有。何以故。如來世尊常以慈悲濟度為業。復説偈言。
頭如摩陀果，　膚如淨真金，　眉間白毫相，　其目淨脩廣，
如開敷青蓮，　寂定上調伏，　無畏徐庠步，　容貌殊特妙，
圓光滿一尋，　如用自莊嚴，　勇猛自唱言，　我今真是佛。
爾時魔王極自莊嚴在首羅前，告首羅言。我先説五受陰苦因習而生，修八正道滅五受陰，此是邪説。時彼首羅聞是説已甚生疑怪。貌相似佛所説乃非，我為是夢。為心顛倒。聽其所説甚為貪嫉，是何惡人化作佛形，如華聚中有黑毒蛇。我今審知此定是魔，如賣針人至針師家求欲賣針。汝今波旬。聽我佛子之所宣説。」　(T.04, no.201, 301a11-301c26)

『增壹阿含經』[8]

「聞如是。一時，佛在羅閱城迦蘭陀竹園所，與大比丘衆五百人俱。是時，四大聲聞集在一處，而作是説。我等共觀此羅閱城中，誰有不供奉佛、法、衆作功德者，由來無信者，當勸令信如來、法、僧。尊者大目揵連、尊者迦葉、尊者阿那律、尊者賓頭盧。

爾時，有長者名跋提，饒財多寶，不可稱計。金、銀、珍寶、硨磲、瑪瑙、真珠、虎魄、象馬、車乘、奴婢、僕從，皆悉備具。又復慳貪不肯布施，於佛、法、衆無有毫釐之善，無有篤信，故福已盡，更不造新，恒懷邪見。無施、無福、亦無受者，亦無今世、後世、善惡之報，亦無父母及得阿羅漢者，亦復無有而取證者。彼長者有七重門，門門有守人，不得使乞者詣門，復以鐵籠絡覆中庭中，恐有飛鳥來至庭中。

長者有姊名難陀，亦復慳貪不肯惠施，不種功德之本，故者已滅，更不造新，亦懷邪見。無施、無福、亦無受者，亦無今世、後世、善惡之報，亦無父母、得阿羅漢，亦復無有而取證者。難陀門戸亦有七重，亦有守門人，不令有來乞者，亦復以鐵籠覆上，不使飛鳥來入家中。我等今日可使難陀母篤信佛、法、衆。

爾時，拔提長者清旦食餅。是時，尊者阿那律到時，著衣持鉢，便從長者舍地中踊出，舒鉢向長者。是時，長者極懷愁憂，即授少許餅與阿那律。是時，阿那律得餅已，還詣所在。是時，長者便興瞋恚，語守門人言。我有教勅。無令有人入門内。何故使人來入。時，守門者報曰。門閤牢固，不知此道士為從何來。爾時，長者默然不言。

時，長者已食餅竟，次食魚肉。尊者大迦葉著衣持鉢，詣長者家，從地中踊出，舒鉢向長者。時，長者甚懷愁憂，授少許魚肉與之。是時，迦葉得肉，便於彼沒，還歸所在。是時，長者倍復瞋恚，語守門者言。我先有教令。不使人入家中。何故復使二沙門入家乞食。時，守門人報曰。我等不見此沙門為從何來入。長者報曰。此禿頭沙門善於幻術，狂惑世人，無有正行。

[8] 下線部はトカラ語 B の因縁譚と関連のある部分を示している。

爾時，長者婦去長者不遠而坐觀之。然此長者婦是質多長者妹，從摩師山中取之。時，婦語長者言。可自護口，勿作是語，言。沙門學於幻術。所以然者，此諸沙門有大威神，所以來至長者家者，多所饒益。長者。竟識先前比丘者乎。長者報曰。我不識之。時婦報言。長者。頗聞迦毘羅衛國斛淨王子名阿那律，當生之時，此地六變震動，遶舍一由旬內，伏藏自出。長者報言。我聞有阿那律，然不見之耳。時，婦語長者言。此豪族之子，捨居家已，出家學道，修於梵行，得阿羅漢道，天眼第一，無有出者。然如來亦說。我弟子中天眼第一，所謂阿那律比丘是。次第二比丘來入乞者，為識不乎。長者報言。我不識之。其婦語言。長者。頗聞此羅閱城內大梵志名迦毘羅，饒財多寶，不可稱計，有九百九十九頭耕牛田作。長者報言。我躬自見此梵志身。其婦報言。長者。頗聞彼梵志息，名曰比波羅耶檀那，身作金色，婦名婆陀，女中殊勝者，設舉紫磨金在前猶黑比白。長者報言。我聞此梵志有子，名曰比波羅耶檀那，然復不見。其婦報言。向者，後來比丘即是。其身捨此玉女之寶，出家學道，今得阿羅漢，恒行頭陀，諸有頭陀之行具足法者，無有出尊迦葉上也。世尊亦說。我弟子中第一比丘頭陀行者，所謂大迦葉是。今長者快得善利，乃使賢聖之人來至此間乞食。我觀此義已，故作是言。善自護口，莫誹謗賢聖之人，言作幻化。此釋迦弟子皆有神德，當說此語。

時，尊者大目揵連著衣持鉢，飛騰虛空，詣長者家，破此鐵籠，落在虛空中，結跏趺坐。是時，跋提長者見目犍連在虛空中坐，便懷恐怖，而作是說。汝是天耶。目連報言。我非天也。長者問言。汝是乾沓恕耶。目連報言。我非乾沓恕。長者問言。汝是鬼耶。目連報言。我非鬼也。長者問言。汝是羅刹噉人鬼耶。目連報言。我亦非羅刹噉人鬼也。是時，跋提長者便說此偈。

為天乾沓恕。　羅刹鬼神耶。　又言非是天，　羅刹鬼神者。
不似乾沓恕，　方域所遊行，　汝今名何等。　我今欲得知。

爾時，目連復以偈報曰。

非天乾沓恕，　非鬼羅刹種，　三世得解脱，　今我是人身。
所可降伏魔，　成於無上道，　師名釋迦文，　我名大目連。

是時，跋提長者語目連言。比丘。何所教勅。目連報言。我今欲與汝說法，善思念之。時，長者復作是念。此諸道士長夜著於飲食，然今欲論者，正當論飲食耳。若當從我索食者，我當言無也。然復作是念。我今少多聽此人所說。爾時，目連知長者心中所念，便說此偈。

如來說二施，　法施及財施，　今當說法施，　專心一意聽。

是時，長者聞當說法施，便懷歡喜，語目連言。願時演說，聞當知之。目連報言。長者當知，如來說五事大施，盡形壽當念修行。時，長者復作是念。目連向者欲說法施行，今復言有五大施。是時，目連知長者心中所念，復告長者言。如來說有二大施。所謂法施、財施。我今當說法施，不說財施。長者報言。何者是五大施。目連報言。一者不得殺生，此名為大施，長者。當盡形壽修行之。二者不盜，名為大施，當盡形壽修行。不婬、不妄語、不飲酒，當盡形壽而修行之。是謂，長者。有此五大施，當念修行。是時，跋提長者聞此語已，極懷歡喜，而作是念。釋迦文佛所說甚妙，今所演說者，乃不用寶物，如我今日不堪殺生，此可得奉行。又我家中饒財多寶，終不偷盜，此亦是我之所行。又我家中有上妙之女，終不婬他，

是我之所行。又我不好妄語之人，何況自當妄語，此亦是我之所行。如今日意不念酒，何況自嘗，此亦是我之所行。是時，長者語目連言。此五施者我能奉行。是時，長者心中作是念。我今可飯此目連。長者仰頭語目連言。可屈神下顧，就此而坐。

是時，目連尋聲下坐。是時，跋提長者躬自辦種種飲食與目連，目連食訖，行淨水，長者作是念。可持一端氎奉上目連。是時，入藏内而選取白氎，欲取不好者，便得好者，尋復捨之，而更取氎，又故爾好，捨之，復更取之。是時，目連知長者心中所念，便説此偈。

施與心鬪諍，　此福賢所棄，　施時非鬪時，　可時隨心施。

爾時，長者便作是念。今目連知我心中所念。便持白氎奉上目連。是時，目連即與呪願。

觀察施第一，　知有賢聖人，　施中最為上，　良田生果實。

時，目連呪願已，受此白氎，使長者受福無窮。

是時，長者便在一面坐，目連漸與説法妙論，所謂論者。施論、戒論、生天之論，欲不淨想，出要為樂。諸佛世尊所説之法，苦、習、盡、道。時，目連盡與説之。即於座上得法眼淨，如極淨之衣易染為色，此跋提長者亦復如是，即於座上得法眼淨，以得法、見法、無有狐疑，而受五戒，白歸佛、法、聖衆。時，目連以見長者得法眼淨，便説此偈。

如來所説經，　根原悉備具，　眼淨無瑕穢，　無疑無猶豫。

是時，跋提長者白目連曰。自今已後恒受我請，及四部衆，當供給衣被、飯食、床臥具、病瘦醫藥，無所愛惜。是時，目連與長者説法已，便從坐起而去。」

(T.02, no.125, 646c29-648b28)

以上の引用から明らかなように、物語の仔細な部分については相違が見られるものの、『大莊嚴論經』と『增壹阿含經』の物語は基本的には布施の効用を説くという同一の内容を伝えており、且つ波線で示した詩節も類似した内容であると言える。そして、ここで先に引用した『出曜經』も考慮に入れるならば、この三つの物語は共通の物語に由来し、波線で示したようにほぼ類似した詩節と関係づけられていたと推定する事が可能であろう。筆者の推定が正しいならば、『出曜經』が編纂される段階で内容の共通性から、この物語は Udv. X 8 に結び付けられ因縁譚として採用され、一方トカラ仏教ではこの物語は同一の章に属する別の詩節である Udv. X 2 の因縁譚として利用されたものと考えられる[9]。

なお、ここで引用した『增壹阿含經』の物語はここで完結しているわけではなく物語は続いており、この後半の部分は説一切有部の Udv.に対応するパーリ仏典«*Dhammapada*»の注釈である«*Dhammapada-aṭṭhakathā*» に確認される[10]。この注釈では、この物語は当該仏典の第 49 詩節に対する因縁譚として利用されているが、この詩節は Udv. XVIII 8 に相当し、別々の部派で異なる詩節に関係づけられた事を窺う事ができる。

---

[9] 『出曜經』におけるこのような状況については、平岡 (2007) を参照。なお、同じく UA に比定されるトカラ語 B 断片 B50a2 は Udv. X 8 を対象としているが、断片の残存状況が悪くどのような因縁譚を与えていたか、明らかにする事はできない。

[10] Norman (1970: 366-374) を参照。仔細な点については『增壹阿含經』の物語とは相違が見られるものの、基本的には同じ類型の物語である。なお、このパーリ語の物語は *Jātaka* 78: *Illīsa-jātaka* の導入部としてほぼそのまま取り込まれている。この点については Burlingame (1921: 49) を参照。

筆者は荻原 (2011a, 2011b) 及び本稿で指摘した例を利用してトカラ語の UA の成書過程に関して論じてきたが、最後にトカラ語 UA と梵文 Udv.の関係に関する最新の論考である Tamai (2013) について言及しておきたい。玉井論文は UA に対応する梵文が存在していたか否かについて論じてはいないが、概ね下記のような発展過程を想定している[11]。

梵文 Udv. → Skt./Toch. bilingual Udv. → Toch. Udv. → Toch. UA

ただ残念ながら、上記論文中にこのような発展過程を導くに十分な根拠を提示しているとは言えず、この仮説を支持する文献学的な裏付けを欠いている。トカラ語には Udv.以外にも梵文・トカラ語の bilingual の仏典が存在しているが、彼等がどのような意図でこのような文献を作成したのかという点については明確な結論が出ていない。また、bilingual の仏典とトカラ語のみの仏典が併存していた可能性が考慮されていないばかりか、何故に bilingual の Udv.がトカラ語のみによる写本に先行していなければならないのかという点について議論されていない。このような仮説は、梵文からトカラ語への仏典の翻訳やトカラ仏教における仏典編纂について単純すぎる見解であると言わざるを得ない。

さらに、玉井論文 (pp. 321-331) は UA 写本とされてきた B9, 10, 41 が UA ではなく阿毘達磨文献の翻訳であると見做しているが、荻原 (2011a: 224 注 21) で指摘したように、阿毘達磨的な議論が漢訳『出曜經』(T.04, no.212, 698b8-c3) においてもトカラ語断片 B41 が対象とする Udv. XV: *Smṛtivarga* に見られる事を見落としており、この見解には同意できない。また、訳文の一致度の高さから、トカラ語断片 B41 が漢訳『阿毘達磨大毘婆沙論』からの翻訳であるとする説を提出しているが、訳文の一致は両者が共通のインド語原典から個別に翻訳された事に起因する可能性を排除しており、説得力に欠けている[12]。

4. 結論

本稿ではトカラ語 B の UA 写本 B23b3-7 に *Avādana* と見られる作品が縮約された形で引用されている点及びこの物語は引用に際して部派毎に本来とは異なる詩節に関係づけられ

---

[11] Tamai (2013: 334-335) を参照。なお、同論文 317-318 頁において玉井氏は、フランス所蔵トカラ語 B 断片 PK NS 22b6 は Udv. XXXI 28 に対応する部分を含まないと指摘しているが、このトカラ語部分に対する玉井氏の解釈は誤っている。即ち、玉井氏はトカラ語 B: *māykemanentse* を *mā ykemanentse* とする Lévi の解釈に基づき梵文との対応を調査し、対応箇所は見られないとするが、この部分は *mā* = *ykemanentse* と解釈し、否定辞 *mā* と語根 *aik-* 'to know'の現在中動分詞 *aikemane* が sandhi によって結ばれ、且つ梵文 Udv. XXXI 28b: *avijānataḥ* に従い、通常は不変化の現在中動分詞に単数属格語尾が付されたと理解すべきである。そして、先行する *kreṃt pelaikne* は Udv. XXXI 28b: *saddharmam* に対応する。トカラ語 B: *mā aikemanetse* と Skt.: *avijānataḥ* との対応は、Sieg and Siegling (1931: 486) で出版された Udv.の梵語・トカラ語 B による bilingual 断片にも確認される。また、この種の sandhi については、Krause and Thomas (1960: 73) を参照。

[12] 訳文の一致度の高さだけでなく、唐代における中央アジア仏教に対する中国仏教の影響の高さを根拠として、一部のトカラ語仏典が漢訳仏典から翻訳されたとする見解が Tamai (2012: 186) でも提出されているが、上記の理由やトカラ語における漢語からの仏教術語が殆ど見られないという事実を説明できないため同意する事はできない。なお、筆者が把握している限り、漢訳仏典を原典として想定しなければならないトカラ語仏典は皆無である。

て因縁譚として利用されたと推定される点を論じた。トカラ語文献は残存状況が良くないものが大部分であり、またトカラ語仏典が基礎にしたと見られる梵文仏典も完全な形で回収される事は稀であるためトカラ語仏典の研究には困難が伴う。本稿で扱ったトカラ語の物語も完全に一致するパラレルを見出してはいないが、このような方法を用いる事によって、間接的にではあるが、彼等に知られていた仏典をある程度回収する事ができるのではないかと考えている。UA のその他の部分についても、さらに調査を続けて行きたい。

参考文献

Bernhard, Franz (1965) *Udānavarga*. Band I. Einleitung, Beschreibung der Handschriften, Textausgabe, Bibliographie. (Sanskrittexte aus den Turfanfunden. X). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Burlingame, Eugene Watson (1921) *Buddhist Legends*. Part 2. London: Pali Text Society.

平岡聡 (2007)「『出曜經』の成立に関する問題」『印度學佛教學研究』 55-2: 842-848.

Krause, Wolfgang and Werner Thomas (1960) *Tocharisches Elementarbuch*. Band I: Grammatik. Heidelberg: Winter.

Lüders, Heinrich (1979) *Kleinere SanskritTexte. Heft. 1. Bruchstücke buddhistischer Dramen. Heft. 2. Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta* (Monographien zur Indischen Archäologie, Kunst und Philologie, Bd. 1.) herausgegeben von Heinrich Lüders. Wiesbaden: Franz Steiner. Originally published in: Lüders, Heinrich (1926) *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta* (Kleinere Sanskrit-texte Heft II). Leipzig: Deutsche Morgenländische Gesellschaft.

中谷英明 (1988) 『スバシ写本の研究』京都: 人文書院.

Norman, H. C. (1970) *The Commentary on the Dhammapada*. Vol.1. London: Pali Text Society.

荻原裕敏 (2011a) 「トカラ語 B«*Udānālaṅkāra*»に於ける *Avadāna* 利用について」『東京大学言語学論集』(TULiP) 31: 213-233.

荻原裕敏 (2011b) 「『阿蘭那經』に比定された *SHT* 所収梵語断片について」 『東京大学言語学論集』(TULiP) 31: 235-268.

Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1931) Udānavarga-Uebersetzungen in„Kucischer Sprache“ aus den Sammlungen des India Office in London. *BSOS* 6-2: 483-499.

Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1949) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 1. Die Udānālaṅkāra-Fragmente, [I] Text, [II] Übersetzung und Glossar*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

T. = *Taishō Tripiṭaka*.

Tamai Tatsushi (2011) Transliterations of the Tocharian B *Udānālaṅkāra* Fragments in the Berlin Collection. 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第 14 号: 81-125.

Tamai Tatsushi (2012) Tocharian *Puṇyavantajātaka*. 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第

15 号: 161-187.

Tamai Tatsushi (2013) The Tocharian *Udānālaṃkāra*. 『創価大学国際仏教学高等研究所年報』第16 号: 315-336.

Thomas, Werner (1983) *Tocharische Sprachreste: Sprache B. Teil I: Die Texte. Band 1: Fragmente Nr. 1-116 der Berliner Sammlung. Neubearb. und mit einem Kommentar nebst Register versehen von Werner Thomas*. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

*TochSprR(B)*I = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1949).

On the Quotation of an Avadāna Text in the *Udānālaṅkāra* in Tocharian B (2)

OGIHARA Hirotoshi

Keywords: Tocharian B, *Udānālaṅkāra*, *Udānavarga*, (Mūla-)Sarvāstivādin

Abstract

Among the Tocharian B Buddhist texts, there is a literary work entitled the *Udānālaṅkāra*, a commentary on the *Udānavarga* in Sanskrit. According to this text, the author is called *Dharmasoma*, although neither his work nor his name has been known to the Buddhist Sanskrit literature yet. This text reveals that the *Udānavarga* in Sanskrit had prevailed in Tocharian Buddhism. However, the *Udānālaṅkāra* has not yet received the attention that it deserves.

In this paper, I will discuss the textual material used in the *Udānālaṅkāra* in Tocharian B. According to my research, the Avadāna text which is given as the 48th text in the *Kalpanāmaṇḍitikā* in Sanskrit is quoted here as the narrative attached to Udv. X 2. However, it is worthy of notice that the same text is used as the narrative attached to Udv. X 8 in the Chinese commentary on the *Udānavarga*. This fact could show that the original tale connected to this verse would have been replaced by this Avadāna text in the course of the compilation of the *Udānālaṅkāra* in Tocharian, and could also confirm my hypothesis proposed in Ogihara (2011a) that no original Sanskrit text existed that corresponds to the whole text of the *Udānālaṅkāra* in Tocharian.

(おぎはら・ひろとし　中国人民大学国学院)